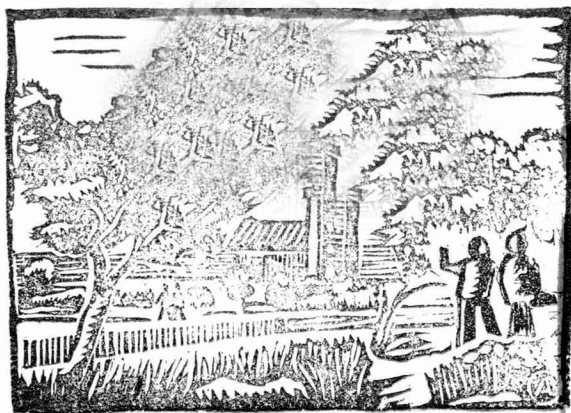




死と栄光

—戦犯死刑囚の手記—



死 と 栄 光

——戦犯死刑囚の手記——

昭和三十二年二月五日印刷
昭和三十二年二月十日発行

定価 二百六十円

地方
売価 二百七十円

編著者 巢鴨遺書編纂会

発行者 長嶋正巳

東京都新宿区新小川町二ノ八

発行所 長嶋書房

電話九段(83)四三二一
振替東京四三七六二

印刷 東陽印刷製本株式会社

製本 小高製本所

落丁・乱丁本はお取り替えます。

まえがき

正義と人道の名目の下に、我々四千名は戦犯者として或は刑場の露と消え、或は十一年にわたつて内外の獄舎につながれてきた。

そのことの当否は後世史家の判定にまづとして、少くとも戦争に参加し、悲惨な結果を世に招来した一員であればあるだけ、現在の与えられた運命の中にあつても、将来の日本のために、何物かを残さなければならぬと考えた。たまたま刑死せる囚友の遺稿を見るに、かれらは自己の死よりも肉親を思い、日本の再建と世界の平和への切々たる祈りを陳べている。これこそ世に残さなければならない、と痛感せざるを得なかつた。死に直面せる、これら九百余名の悲願を世に伝え、将来に生かすことこそ、同じ運命の中に生き残つた我々の責務である。

このような念願から、昭和二十七年八月、同志を糾合して遺書編集会を結成し、戦犯遺稿集刊行の企図を全国の遺族等にはかつたところ、遺族は勿論、かつての戦友、囚友からも続々と資料が寄せられた。あたかもそれらの人々は、この機会の到来を一日千秋の思いで待たれたかの感があつた。

戦犯刑務所は巢鴨の外、大陸南方諸島五十余个所に及ぶが、その大半は筆紙の所持を厳禁し、或はそれを与えても処刑後遺稿を没収した。また監視の眼をくくつて書き遺されたもので、現地に秘匿したまま、遂に持ち帰れなかつたものもあり、これらの実情から見て、集め得る遺稿は刑死者の三、四割程度と推定していたが、事実は八割に垂んとする七〇一篇に達した。

蒐集した資料は遺書の外、日記、手記、隨筆、詩歌、書翰、伝言等、少くとも故人の心を知り得るものすべてにわたつ

ている。これらは便箋や旧軍用野紙に書かれたものの外、包装紙、トイレットペーパー、タバコの巻紙、書物の余白、また余白を截つて貼り継いだもの等があり、紙以外に、敷布の断片、シャツ、ハンカチーフ、板等も含んでいる。その大部分は鉛筆書きであるが、ペン書、墨書、血書等もあり、また本の活字の横に、針でしるしをつけ、文章を綴つたものもあり、中には汚れとしてみで、ボロボロになつたものもある。これらを見るとき故人が如何に心血を注いで、最後の一瞬まで自らの遺志をその遺族に、また同胞に伝えんとしたか、更には至敵なる監視の下にありながら、これをひそかに持ち帰らんとした、囚友、教誨師等の苦心は、如何ばかりか察するに余りある。もちろんそこには好意ある現地人の協力があつたとしても……。

編纂に當つては、どこまでも個々の意思に忠実を旨とし、何ら特定の色彩方向を持たず、また紙数多き遺稿はなるべく遺志の最も明確な部分を選んだ。かくて数万枚の資料を整理し、一年余を費して原稿用紙約二八〇〇枚にまとめ、「世紀の遺書」としたのであるが、今回普及版として長嶋書房より刊行するに当り、約百篇にまとめてみた。何れを選ぶかは必ずしも容易でなかつたが、単なる選集に終ることなく、それによつて全体をうかがい得るために、一応各種傾向のものを網羅したつもりである。また、原文は平仮名、片仮名、旧仮名づかい等区々であるが、この際は平仮名、新仮名づかいに統一し、短歌、俳句のみは旧仮名づかいによることとした。それらすべてのことは、ただ広く普及し、一人でも多くの手に読んでいただきたいためである。

将来は続巻のかたちをもつて、すべての遺書、手記を刊行してゆきたいとも考えている。このたびの刊行は、やがて全貌を知つていただく手引という意味もあつた。

最後にこの書の印税は、故人の遺志を顕彰し、その遺族を援護するために使用することをお断りしておく。

昭和三十三年一月

目次

まえがき

巢鴨遺書編集会

中国兵の涙（中国）

夕暮れがくると.....黒沢次男（二〇）

中国兵の涙.....吉田保男（二三）

最後の檜舞台.....野田毅（二五）

向井敏明（一九）

涙ぐんでる上海.....前田三郎（二〇）

石のような握手.....大庭早志（二二）

一粒の麦.....田島信雄（二五）

無実の罪.....李白安（二七）

鳥吉喬（二六）

鉄の足枷.....谷川寿夫（二九）

大好きな日本.....酒井正（三〇）

隆（三）

考える葦（蘭印）

玉きはる命のきわに………	五訓を遺す………	子に遺す………	兄弟へ………	兄………	一子に日本教育を………	格子ぬらすは唯涙………	唯心………	神意のままに………	感謝しながら旅立つ………	愛と平和を………	美しく生きん………	純情の若桜………	母を恋う………	生命の余白………	別れの歌………	三年ぶりの宴会………	さらば同胞よ………	独房悲語………	考える草………
長	杉	森	前	董	太	海	岡	上	柳	水	和	高	村	水	中	大	清	半	山
	林		田	田	田	野	田	杉	井	口	田	橋	上	見	村	柴	水	沢	根
幸之助(壱)	武雄(壺)	国造(壺)	利貴(允)	長雄(允)	秀雄(允)	馬一(允)	慶治(允)	敬明(毛)	稔(毛)	繁(毛)	実(毛)	政義(充)	博(充)	実(充)	視(毛)	林(毛)	夫(毛)	勇(毛)	由(毛)

彼岸への友情……………一条 実（允）
 二十四時間の記録……………河村 明（一〇〇）
 上杉 勇 藏（一〇〇）
 旬（一〇〇）

運

命（ビルマ・マレー・北ボルネオ）

運命を諦めよ……………藤田 正 治（一〇八）
 魂の躍動……………生川 清（一二三）
 自然に帰る……………岡 郎（一二三）
 日本の進むべき道……………登 郎（一二六）
 命を大切に……………島 一郎（一二九）
 英国に告ぐ……………村 参 郎（一三〇）
 責を果して……………藤 為 徳（一三四）
 天命……………佐 大 幸（一三五）
 死の朝……………福 石 正 平（一三六）
 美しき仲間……………信 沢 真 寿（一三七）
 俺が死んだら……………弘 田 栄 治（一三九）
 ミルクの杯を上げて……………馬 杉 一 雄（一四一）
 秘密をお許し下さい……………後 藤 辰 次（一四五）
 朝粥のかなしみ……………栄 島 信 男（一七〇）

あ と 二 分 木 村 久 夫 (一七)
 趙 文 相 (一八)
 し ず かな る 暁 の 雨 中 田 新 一 (一四)

義の冠 (仏印・香港)

義の冠わがために 坂 本 順 次 (一五)
 朝 露 残 筆 早 川 揮 一 (一五)
 死 と 神 岩 崎 吉 穂 (一六)
 明 朗 元 氣 左 近 允 尚 正 (一七)
 観 音 経 高 山 正 夫 (一七)
 我 も 遂 に 金 沢 朝 雄 (一七)

南十字星 (濠州)

南十字星のもとに 後 藤 大 作 (一八)
 十八人に代つて 田 島 盛 司 (一八)
 清 節 を 持 っ っ 安 達 二 十 三 (一九)
 鈴 蘭 の 花 咲 く 頃 に 白 木 仁 一 (一九)
 日 濠 親 善 白 水 洋 (一九)

紫すみれ (巢鴨)

勝負は決つた	片山日出雄 (一五)
供養無用	津和野孝彦 (一七)
新しい宗教の時代	馬場正郎 (二〇)
君に捧ぐ歌	篠原多磨夫 (二〇)
	中山洋臣 (二一)
	福原昌造 (二二)

紫すみれの押花	吉沢国夫 (二六)
幼き子へ	満淵正明 (二六)
独り来り独り去る	片岡正雄 (三一)
泣かないで下さい	額川幸正 (三四)
夕やけこやけ	牟田松吉 (三七)
混沌の底に	水口安俊 (三八)
歴史の批判に待つ	東条英機 (三三)
空無	板垣征四郎 (三七)
人生の真味を感じ得	土肥原賢二 (三七)
十字架を負いて	石崎英男 (三八)
天のお父さん	西沢正夫 (四一)

哄

笑 (比島・グワム)

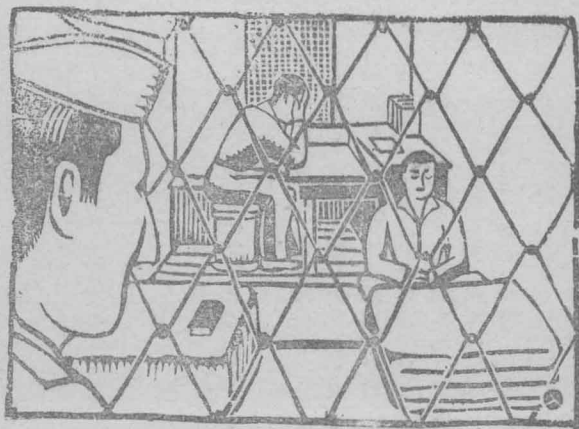
白	雲	岡	資	(二四三)
永遠の平和を	藤	中	雄	(二四八)
愛に生きよ	成	迫	忠	(二五三)
二十六時間の生命	田	口	泰	(二五七)
ギラギラの想い	井	上	勝	(二六一)
	幕	田	太	(二六八)
			稔	(二六八)

哄	笑	小	野	哲	(二七〇)
世を憂いつつ	関	森	儀	道	(二七九)
妻の誇り	本	間	雅	晴	(二八三)
祖国を守れ	山	下	奉	文	(二八六)
酒でも供えて	大	田	清	一	(二八六)
夢のまた夢	徳	永	正	友	(二八八)
人の間	高	階	喜	代	(二九〇)
男の操	上	野	千	里	(二九〇)
戦争受刑者死歿地略図					(三〇〇)

装 幀 長 嶋 武 彦
扉・カット 冬 至 堅 太 郎

中国兵の涙

(中国)



監房で死とギリギリの対決をする死刑囚

夕暮れがくると

黒 沢 次 男

栃木県出身、中央大学法科卒業、元中支派遣
軍参謀部嘱託、昭和二十一年八月十二日、上
海において刑死、三十四歳。

〔遺 稿〕

一 日

夕暮がくると私は今日だけはやつと死なずにいたと思
う。そして宵闇が迫る頃は明日の心構えをせねばならな
い。朝がくると着ているものを全部取りかえて素裸になつ
て冷水でからだをふき清潔なものを身につける、洗面と同
時に洗濯、さあ今日は来るかと、机に向つて、わ言集を書
く。歌を作る。そして昼まであと二三時間ある。そして夕
方を迎える。

こんな張り詰めた生活、満月に引しぼつたような心の緊
張を保ちながら送る一日、私は幾日、幾十日、この生活を
つづけなければならないのだろう。一日、一日の集積が人

生であるとは云え。

瞬 間

この一瞬々々を積み一日として生きている現在、この
瞬間々々を刻む秒は私の生命に喰入つていく。恐らく死の
陰惨さのみに心を注いでいなくてはならないとしたら発狂
してしまうだろう。永遠の沈黙のみに戦慄しているならば
窒息してしまうだろう。恐れてはならない。戦慄してはな
らない。目先の現象に心患して迷う心。

見よ、十万年前の夕空もきつとこんなに美しくあつたら
う。百年前の雲もきつとこんなに輝しかつたらう。またた
く星、美しき月、かれんな虫の声、自然はわれには少しも
かわりはない。悠久、大自然はわれにかかわることはな
い。うたかたの人生に悲しみ歎きて永遠を見得ざるわれ、
この室に挿されしく、ちなしの花とてやがては散る。然れど
も来る夏には再び花を開きて芳香を放つであらう。昨夜の
けらは死んでしまうかも知れないが新しいけらがまた昨夜
と同じようにまた鳴いてくれるであらう。われら人間とて
永遠に絶える事はあるまい。再生を信じよう、新生を信じ
よう、理論も理窟もいらない。この小さなくちなしの花の

美しい生命と、この毎晩鳴いてくれるけらの生命の根底がわかるまでは、人が生れてくる生命の神秘が実証されるまでは、私は無条件で再生を信ずるより外はない。これを否定するなにもものもない。息詰るような苦しみはただ生の欲求のみがなせる業だ。何番何番と死の伝令の呼出しが来れば、私は静かに再生の第一歩をこの監房の扉より踏み出すであろう。その時は絶対感のみが支配する。

生の欲求がなくなれば如何にして限りなき幸福と平安とを得るかである。錦を着て私は故郷ならざる心の故郷、魂の故郷に帰えることであろう。大きな声で呼ぶ囚人同志の話し声に、門のあく音に、心をおのかしているあわれなお前よ、お前はその心と袂別せよ。妄執から逃れ去れ。お前が煩惱に苦しんでいるのは馬鹿になりきれないからだ。生半可な智がお前をそのかしているのだ。神を恐れる心がないのだ。お前は美人に惚れる時その美人の顔と着物に惚れて心の美しさを知らないのだ。イエスキリストでさえ十字架にかかつて死なれたではないか、われらのように罪多き凡人が、やれ冤罪であるとか無実であるとかを、なぜ歎く必要があるか、なんの虚栄なんの快樂ぞ、怒りも妬みももつてはならないはずだ。

「罪の払う価は死なり。されど神の賜物は我等の主イエスキリストにありて受く永遠の生命なり」「夫れ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり。凡て彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得ん為なり」

今私が受けている恐怖は暫くの軽い艱難だ。それはやがて与えられるべき大なる永遠の光榮を約束された悩みだ。この悩みから脱して平安を見出さねばならない。すべての待遇もすべての批判も怒る必要はない。却つてその人たちのために祈ろう。

「主は罵られて罵らず苦しめられて脅かさず正しく審きたまう者に己を委ね」静かに歩むべきではないか、その一瞬、その一秒一刻の瞬間、負けてはならない。脅かされてはならない。影法師を見て戦慄する愚を繰り返してはならない。絶対観、それは不変なものだ。不滅なものだ。生滅々する肉体にのみ囚われる心には絶対はない。大宇宙だ、大自然だ、そして魂だ。永遠の魂に生きねばならない。愛は妄執であつてはならない。愛着ではない。この瞬間にも永遠の愛を感じなくてはならない。この花にも、この虫けらにも、この雲にも、そしてこの死刑を宣せられた人達にも偉大なる愛を、神に捧げる愛をかれらにも与えね

ばならない。

日々是好日

春夏秋冬佳日ならざるはなく如何なる日とて佳日ならざるはなし。現在の自分には明日という日が期しがたく、希みがたく、迎えた日が私の全生命であり、全人生なのである。雨も佳し、晴も佳し、嵐もよし、暑き日もよし。すべてに美を感じ、耐え得られない愛着が感じられる。また二度と廻り会ひ得る日があるであらうかと思うと、夕陽に輝く雲にも雨に濡れてる花にもいい知れぬ名残の情がつき得ない。迎える日迎える日が感激の日であり最上の日である。今日一日に残滓物を残さず燃しつくして、明日はまた明日、新しい希望と新しい悩みに酔えばそれで良い。今の私には明日はない。決して今日の事のすべてを明日にもちこさない。悔いがない生活というのか、今日一日に全生涯をかけて生きている私なのだ。今日は日が悪い、私の一生は運が悪いなどと決して歎きはしない。この日も、この人生も、天が私に与えた最上の慈みである。監獄にある事も死を宣告された事も私が死ななくてはならない事も天の教示である。なにか大きなものがここにあるのだと信じて

いる。火も自から涼しいものである。逆境もまた楽しいかな。大自然の動きになにをさからうべきか、神の教示の、大なる命運の伏在する事を疑つてはいけない。阿頭ともに裁断すべきである。自己を忘却すべきである。近視眼であつてはならない。日々是好日、尽大事是薬那箇是自己、花は紅にして山は是れ緑、川はとうとうとして流れている。

たよるべからざる者にたより信ずべからざるものの影法師に憚るものよ、それは何か。心だ、迷う心だ。捨てよ、捨てざるべからず。生きんとして生にとられ死なんとして死にとられるあわれさ、電光影裡の人生に何をためらいなにを恐れるか。大地にしつかりと根を据えた大丈夫たらざるべからず。今日に生きよ、昨日に迷うな。明日はまた明日自ら与えられん。信ぜよ、永遠悠久に尽きざるものを。土より生れて土に死ぬ、これ天の人に与えし宿命なり。牢獄もまた玉楼金殿なり。

無影

力を尽して生への欲求とともに死の恐怖とたたかつてきた。私の全能の限り。

しかし今は安らかならざる心を平静にしてすべてを待と

う。天然の命ずるまま

美しく、美しく。

×

×

これで私の生への義務は尽されたことと思う。あの世への旅をひとりとぼとぼ急ごう。父のいる、弟のいる、祖母のいるあの世へ。

刻々と迫りくる見えざる宿命、私の心は余りにも静か過ぎる。これが死ぬべき人の心かと疑いたくなる。「俺は死なねばならぬのか」と思つてみても一向に深刻なものではない。ただあれもしておかねばならぬ、これもこうしておかねばならぬと過ぎ行く時を惜しむのみ。

なにか他人が死んでゆくような気がしてならない。お前は死ぬのだ、死ぬのはお前なのだ。死とはお前は知らないのか、お前は愛している者ともこの世では永遠に会えなくなるのだぞ。あの美しい夕焼雲も、この美しい名もない花も、お前は二度と見ることが出来なくなるのだぞ、と自身をおどかしてみても、やはり平静さは失われない。どうしたんだお前は、すべての感情を失つてしまったのか。あんなに愛していた妻子との別れが一寸も悲しくはないのか、と問うてみても私の最高の悲哀は涙などは伴わない。俺は

どうかしている。まだお前は本当に死ぬことが信じられないのか、そうかも知れない。呼吸の止まる瞬間まで信じられないのかも知れない。愚な心よ、お前は阿呆になつてしまつた。そうではない、生きることも死ぬることも同じなんだ。俺はどつちでもいいと思つているんだ。生きてても死んでも。

中国兵の涙

吉田 保男

島根県出身、大社中学校卒業。元憲兵曹長、昭和二十二年十一月十四日、済南において刑死二十八歳。

日誌の中より

七月二十三日 火曜日 曇一時小雨

「もうこれで済南の市街も見納めだな」と無理に意識してみても、どうもピンとこないのが不思議でした。なにかしら他人事のように夢のようでした。たつた今戦犯軍事法廷に呼び出されて死刑と有期徒刑八年を言い渡された時も、

何の「ショック」も受けなかつたし、審判長の言い誤りか、自分で聞き違えたのではないかと疑つたほどでした。

行きには簪の中を歩くような蒸暑い天気であつたのが、帰りには大粒の水滴となつてポツリポツリと落ちてきて遠慮なく顔に叩きつけて頬を伝わり、行き交う支那人が皆ジロジロと振り返つて見るので、涙と間違えられてはと思ひながらも後手に縛られているためハンカチも使い得ず、今まで四回往復した法廷から戦犯拘置所までの三十分の道程を何時にもより遠く感じましたが、しつかりした足取りで歩いて帰りました。

拘置所へ帰つて足枷を嵌められた瞬間——本当は時間的にその瞬間とはつきりと意識した訳ではありませんが、これまで時々抱いた小さな不平不満がすつかり吹つ飛んで一寸した人の好意までが無性に有難く感ぜられるのも不思議です。広田隊長が自分で白布を持つて来て「君のような立派な男をどうしてこんな目に会わせなきやなんのかなあ、済まない済まない、古禪より外に布がないからこれで我慢してくれ。綺麗に洗つてあるからなあ」とオロオロ声でいいながら足枷の金具に布地を巻いて貰つた時は「こんなに優しい隊長がどうして憎まれようか」と思ひ有難く済まな

さに声をあげて男泣きに泣きました。

気がついたら剣つき鉄砲で監視をしていた周囲の四五人の兵隊もみんなホロホロ涙を落して貰ひ泣きをしておりました。兵隊達の親切も身に沁みます。二週間程前に警備交替に來た支那兵——言つても程度は案外よく、概ね支那の中学校卒業程度（日本の高等小学校卒業程度）の連中で家庭的にも恵まれた連中が多くみんな字が読めますし、六カ月の教育を受けて少尉に任官するのです。学兵と称しております。彼等も人情には変りはありません。独房に移された僕を見舞に來て覗き窓から「希望を失うな」とか「心配して病氣しないようにせよ」と慰めの言葉をかけてくれますが、相手になつて話している中に「何故貴兄は捕まる前に逃げなかつたか」と聞き「悪い事をしていないから逃げる必要はなかつたのだ。それに上官や友人を捨てて逃げるのは卑怯者だから……」と言うと彼等は感激しました「俺に力か金かどちらかが有つたらなあ」と言つて残念がつて泣き出してしまひ今度はこちらが慰めるのに骨を折るのです。

張と云う二十才になる学兵の如きは夜中にそつとやつて來て「貴兄は立派な人だから逃がして上げたい」と言うの